



初 夏 日 記

水 野 仙 子

六月五日。

おとゝひ着替へたるチルの、朝はまだ稍々肌寒さを
 覺ゆれども、硝子戸品よき洋物店に、シヨールのかけ
 は見えすなりて、かざられたる夏帽子など、白々たる
 がいと晴々し。そよ何となう夏めきたりき。さびたり
 し八百屋の店に、蠶豆青々と盛られて、やう／＼に生
 氣つかむとす、堆き夏蜜柑の色何となく胸を透かす心
 地ぞする。

お針の師訪ふと茲に三年、通ひなれたる通り横町の
 今朝ふと氣まぐれに戸敷を數へ見ぬ。まづ芝居のビラ

前角の茶屋よりしめて一軒二軒、かくて學校の
 前角まで、五日ばかり前空きたる家もろともに廿八軒
 横なる道を後にして、學校の脇道に入れば、端なる家
 は、戸に桑仲買のまづき文字。それより五軒と數へて
 ほと息を切りたる時、顔のみ馴染の赤き手からの若き
 妻、爐の火つくろふ火箸の手とめて、愛らしき鐵漿の
 商現はしぬ。此家、店なる品は、下れる草鞋に並べる
 マツチ、棚に蠟燭あり、塵紙あり、さてはいろ／＼
 と箱に駄菓子、乾つく咽喉に、盛り切一ぱいの魚には
 鯛、よろづ間に合ふと、近在通ひの馬子達がお得意な
 り。まこと夏なり、こゝに蒸し芋の息たゝすなりて、
 かはりに出でしは桶の水にとろてん、棚なる徳利に
 口したる杉の葉も青々しう、戸には某呉服店の、夏物
 賣出しのしの字大なり。

ひとり離れて杉垣圍ひの、師の君が家まで、棟割長
 屋十七と數へられぬ。

此夕夕立あり、雷遠くに聞ゆ。

母君のセルやう／＼縫ひ上りたれど、共襟かけだけ

残りぬ。
おなじく

同、六日。

肥りつぼの其體には、前衿の大巾ならでなど、人悪るく姉上押揃ひ給ふに、耳を塞ぎて急ぎ家を出づれば、憎らしや猶、笑ふ聲の耳に響き來る。

令嬢氣取りてなど、母上のたまひ乍らも、望めりし被布、縫ふべく今日は許されぬ。袖丈は五分つめよとなれど、今年二年はと何となう心細し。

彼の家に、かの若き妻の姿は見えず、一臺二臺道塞ぐるが常なる荷馬車の影もなく、人もあらず、家のうち何となう静けき様なり。二三軒過ぎてふと振り回りに見たる時、笄長きおばこ髪のお婆、急ぎ彼の家に、はいるを見る。さてはとまた見回られぬ。いよ、彼の妻産氣つきたるなるべしと。末子と産れたる身は産の如くなるものかを知らず、人事乍ら氣遣し、たい安かれと心に念じて。

話の切れ目／＼を針の手とめては彼の人は何したらし、早や産れてか等と氣を損むを、人々可笑しと

笑ひ給ふ。さては彼れは貴女のお姉様？など、我顔覗き込む君の笑み憎らし。

仕返しに、蚤の礫を、君の針さしにさして遣りぬ。

三時頃、落ち來りし一粒二粒、思ひ返して空はまた晴れつ、届け呉れたる傘、徒らに邪魔となりぬ。

同、七日。

來客の爲め、少し後れて行けば、日は校庭に葉櫻の影黒う、少なき女生徒の體操初められてあり。見遣りつゝ歩みを運べは、彼の家に赤兒の泣く聲我を驚かしぬ。さてこそと胸は躍りつ、見れば出商ひに留守勝ちの夫、父なる人、爐の傍に柴折りて居ぬ、耳はひたす奥にや傾むく、子供一人店に立ちたるを、と思ふ時、軽く我肩を打つ人あり、驚きて見れば富子の君、また一つ軽く叩きて、お目出度うと、何かは知らず、顔見合せて失笑しぬ。秋の鹿々かしさ、折角樂しみの辨當解けば、菜入はたい白く綺麗に。今朝の忙しさは承知乍ら、人ある如く罵しれば、師の君笑ひて煮豆を給ひぬ。

同、八日。
朝より暖き日なり。途中、何處よりか首輪なき巨犬

女なりしかと打ち微笑されぬ。
同、九日。

我物なればか、常よりは捗ゆきて、午少し前被布は

す。在所の
母ならんか
彼の家に面
影似たる中
年寄の働く
を見ぬ。ふ
と見れば御
燈明あか
あかと照り
輝きて、白
き紙は神棚に貼られたり。いよく名は付けられたるら
しと、まぐさ喰む馬の背のかげ、身を反らして凝視れ
ば、一、出生、千代の墨跡鮮かに。さては同じ運命の



豊様の飛白の四つ身頼まれて歸る。
夕げ終つたる頃より強き雨あり。電光頻りにす。
同、十日。

仕上りぬ。
初のハイカ
ラなど、貶
されたれど
裏の白きは
紫紺に映え
たり。
歸り路、
馬場なる叔
母上尋ねて
お團子の馳
走になりつ

牡丹は亡び、躑躅散り、花かつみまた色褪せて、檜
扇やうく丈延びたり。

心地よき好天氣。

襖襟干されたる彼の家の裏にも、撫子の色あざやかなるを見て。

同、十一日。

師の君が許に人の來て、毎田川の菖蒲、今盛りなり
と傳ふ。近く率てゆかむと約し給ふ。

同、十二日。

清子君が急ぎのものと手傳へたれば、歸りは早や街に
電氣つきぬ。

歸り見れば、西の京なる從姉より小包着きてあり。

急ぎ開き見れば優しき女持ちの扇一對嬉しきこと限な
し。母上は添へられたる手紙の手蹟を褒めて、少し心

せよと我を嗜め給ふ。故とにはあらざりしかど、夜、
久々にて雁のゆきかひを繕きぬ。

同、十三日。

東京に於ては、さうしては、六月かけて、東京に行

き來りし由、様々と達者なる話あり。われは桃割に結
ぶ。義夫の運動襦衣作るべく、白キヤラコ求めて午後
よりゆけば、人々明日は花菖蒲見とて、さゝめき合ひ
居ぬ。

明朝は降るなと心に祈りてさて床に。

同、十四日。

八時家を出でぬ。一行に例の小夜子の君居たれば、
名高き氣取りやの君も、半巾口をはなれざりき。晴れ
と着かざりし人々、此地にも流行の潮は流れて、オリ
ブの洋傘、七分をしめぬ。

行程一里半、園につきたる時はすでに十一時過ぎな
り。去年よりは花輪大きけれども惜しや開き過ぎたる
のうらみあり。主人は云ひぬ二三日前が見頃なりしと
さもあるべし。

空じき腹は鯨に膨らみたれど、冷たき水の戀しさに
一草履つきかけて、松の木蔭を徜徉ひぬ。先刻茶屋
の女の手桶を下げてこゝより出でたるを見れば、袂
き一寸の道を見出で、柔き土踏みて、奥へくと

入れば、名も知らぬ小き花咲き亂れて、松の樹の
 松の樹、追々に繁し、振りかへり見れば遙かなるとこ
 ろ、茶屋
 の白幕う
 ちそよぐ
 のみ、林
 の中、身
 に纏へる
 浴衣の白
 きが氣味
 悪るし。
 清水など
 あり得べ
 くも見え
 ざれば、
 戻らんか
 とそと立
 ち止れば、

ふと目に入りし古き井戸、それよとばかり

まざく胸にうかびては堪え難う、身を顔はして一二



きやうな
 るに折か
 らとて心
 淋しう、
 さては深
 碧ゆるが
 ぬ井の水
 に、七草
 模様の衣
 亂れて、
 眞白き面
 におどろ
 とかゝる
 黒髪のに
 ーなどと

歩退りぬ。折しもはるかに絃歌の聲。迷ひたる旅人の
人里近きを知りたる時の如、俄に心強う、思ひ返して
近寄りつゝ、繩のみ新らしきつるべ下せば、鏡は破れて
我顔は碎けぬ。水は冷たし心地よし。後れ毛かきあげ
また水の面を覗き見れば、松の影、笹の影、ゆら／＼
／＼と稍々に静けし。汗おさまりたる身を、やがて菫
蒲のかげに現はせば、人々何處にとて顔うち見成る。
それよ人々、うかべる其微笑みを何と見し。
女の足の遅れがちに、町に入りたる頃は灯ともされ
ぬ。

湯に入りたれど足重し。

直ちに前後も知らず……。(十五日記)

同、十五日。

ふと目覺れば折しも鳴り出したる柱の時計、八つと
數へられたるに驚きて飛び起くれば、足の重きに昨日
を思ひ出されぬ。揚子口に、井戸端に至れば、珍らし
や桶の水に一八美し。今し方六軒の爺が我にとて持ち
来し針、木炭の灰は云へぬ。さるにてもいたら霞

過したるものかなと心恥かし。進まぬ靴げすませば、
花の師、毎田川の歸りなりとて寄らる、白の薔、四五
本携へ給ひたれど露は早干てあり、幸ひに彼の一八逆
勝手に生けぬ。

裁縫は休みつ、夕げ後用ありて、師の許訪はんと例
の道何氣なく行きしが、ふとあるものを見出で、我身
はそこに釘づけにされぬ。

見よ二日見ぬ此家のこの光景を、閉ざされし戸は静
に開けられて、香の香こもる灯はさと黒き道を割りつ
地に長う影うつしたるは僧なり。續けるは老爺、その
背に負ひたる小箱はそも何ぞ、蔽ひたる白布にそれと
知らるゝ、框にあらずや、さらば何人の？問ふまでも無
し、打ちかけたる花色染めの一つ身は、生るべき子の
玉肌包むと、或る日膝にひろげて彼の妻の、鈍き針先
を油の髪に通すを見たりしそれなるを。あゝ千代子は
死したるなるか。それよ健かなりとのみ、一昨日の夕
つ方美しき車の止まり居たりしも醫師のそれとは氣づ
かざりしが……。

若者の持ちたる笹の、白張提灯ゆらめきいで、厩ろに燭の火は透きて見ゆ、送る人はたゞ二人、鐘の音細く僧に従きて、今はと立ち行く冥府の門出、喪簾のかげ、人の影するは母か、祖母か、あはれさめたくと忍び泣く音の……見上ぐれば星の瞬き夢の如、夢見心地に我もまた框に従きぬ。笹さらりと風に鳴いて、心あるや冥路を導く灯のたゆたひ、もの言はぬ人々の顔はの白う、框負ふ老爺の草鞋踏みしむ音は、露、苦すべる冥府の岩戸に洞より反して響く足音、魂やさまよひ出でんかと、身のうちさつと水を浴びぬ。道分るるところ、のぞめば遙に森のかげ黒う、こそよ千代子が墳墓所、框は静に道を入りぬ。

暫くは見送られつ、實にはかなき汝が運命よ生れ出で、僅かに九日、十日、さとも世のけがれを知りて姿なき慈母の膝下に急ぐか、さらでもあれ、残されし汝が母の、汝が父の、悲歎はそも幾何ぞ、今宵この框見送らんとては十月の苦しみはせざりしものを。此世に面は見ざりしとても、前の世慈しみし汝が運命の、

あまりにはかなきを我は悲しむ魂は迷はて住けとばかり、佇む袖をふく涼風に、忘れし我にかへりぬ。宵に見しこと、胸にうかび目にうつり、目の牙ゆる夜なり。

同、十六日。

行きも歸りも彼の家の戸は閉されたり。過ぐる雪の日のつれづれに、誰やらが發議の阿彌陀、我可笑しくも使の鬨にあたりて、詮方なくくお薩をと面赤めて、彼家の店に立ちたりしが其折よ、お寒きところをというく勞らひし彼の妻の、好いたらしうと思ひし心、日々に面を見交しては、悲しみもはた歎きも人事ならず思はるゝぞかし。

子を失ひし母人よ、恙なくてか。

夏は漸々暑からんとするを。